大阪日々新聞紙

第九二号

静岡縣下我入道村の漁師後藤文五郎が一子徳蔵へ明治八年十六才なるが或夜網を引んとて今一人の若者と両人舩に乗込んで闇の世ろ〳〵まぐるに夜不沖へ漕出して一番場所を取らんとて漕ぎ〳〵浮窪のかゝまくら竹を呼声ふと目を覚し行くを見きそ居いふ漕く〳〵る大海の荒浪逆まき動揺せりきも両人櫓をあしらそかゝて闘へ〳〵罰当の者力の加ぎり押うくに連浪おそ徳蔵が櫓をいなをして折るを〳〵櫓ツクを脇の肋を突ぎりあぐ櫓をうくるをたゝあゝ切る所へまくるの舩〳〵漕ぎ〳〵ふ徳蔵遠かゝれ誤つて腰をぎりこそあとでぐと云ふ近く見ふ腸三尺ばかりも出しべ連れ〳〵西の御療終る迄顔色かゝらぐ腸かゝふ苦痛を見せぬ実剛気の壮者なりと報知六百七十三号に記せり

因て云ふ櫓ツクを小指を上へ立て舟を漕ぐ指を上へ立て舟のくぐる事を云ふくぐる事なり

怪我なりと古くより云ふくぐる事なり

小信改二代
歌川豊国
御寿商
国芳画

市ノ九一